

0. はじめに

新聞の見出し¹は限られた字数でより多く情報を簡潔かつ正確に伝えるため、短縮された表現が使われ、通常の文と違う表現形式が多く見られる。助詞止めは見出しの大きな特色と言える。本稿では助詞止めの見出しの中によく現れる「へ」で終わる見出しに注目し、見出しを止める「へ」の特徴を探ってみたい。

1. 先行研究とその問題点

見出しについての先行研究として、朱(1992)、野田(2006)と李(2008)があげられる。朱(1992)は、朝日新聞の朝刊 1987 年 1 月の総合面 (1, 2, 3 ページ)、国際面、経済面、スポーツ面、社会面に載った主見出し 2386 本について、文字の種類や大きさ、主見出しの止め方などについて分析し、名詞止めが 1712 本で 7 割以上を占めること、助詞止めは 293 本で 1 割強であり、「に」「へ」「も」「を」「か」の順であることを指摘している。野田(2006)では、見出し末における格助詞及びとりたて助詞の特徴が論じられている。その中で、見出し末の「へ」の特徴について、「へ」の前に来る語に注目し、場所名詞や動名詞が挙げられ、「する」が付加されるとサ変動詞として働く動名詞が最も多いと指摘しているが、「へ」の前に現れる語についての分類はまだ不十分だと思われる。筆者の今回の考察では「平和の尊さ² 未来へ」、「鶴竜初V 横綱へ」などのような見出しも見られる。この二つの見出しの「へ」の前に来る語である「未来」、「横綱」はいずれも場所名詞でもなく、動作性名詞でもない。また、李(2008)はテンスの視点から、格助詞「へ」と「に」で終わる新聞記事の見出しを分析し、「予定」を表す場合には、見出しの文末に「へ」を使い、「既定」を表す場合には、見出しの文末に「に」を使う傾向があるという結論に達している。確かに、李が指摘したように「予定」を表す場合は格助詞「へ」を選択し、「既定」を表す場合には格助詞「に」を使う傾向がある。しかし、逆にいえば、「へ」が「予定」を表し、「に」が「既定」を表すというのは成り立ちにくい。「へ」で終わる見出しが「予定」を表すことや「に」で終わる見出しが「既定」を表すことは単純に言えないと思われる。

2. 見出しの止め方

より詳しい分析を行うため、本稿では読売新聞のデータベースを利用して、読売新聞(読売新聞社 東京朝刊のみ)の 2014 年一年分の一面の主見出しを取り出し、考察対象としている。この一年分の主見出しは「編集手帳」と「解」のコラムの見出しを除いて総本数が 1479 である。見出し文の止め方について名詞止め、助詞止め、動詞止め、形容詞止め、形容動詞止め、副詞止め、その他の 8 つを分類し、考察結果は次の表 1 のようになる³。

表 1 見出し文の止め方

分類	「」内でない	「」内	合計
名詞止め	1089	80	1169
助詞止め	174	7	181
動詞止め	77	16	93

表 2 助詞止めの出現数⁴

助詞	「」でない	「」内	計
へ	92	0	92
に	44	5	49
か	7	0	7

¹本稿では以下「見出し」とする。

²見出しそのものに半角のスペースがあるが、ここで全角で示す。以下同。

³見出しには「」が多く用いられるが、助詞によって「」内に現れやすいか否かにも違いがあるので、それぞれの数を示す。

⁴見出しを止める助詞の出現数の上位 4 以上のものを示す。

形容詞止め	4	4	8
形容動詞止め	5	3	8
副詞止め	6	0	6
その他	14	0	14
合計	1369	110	1479

で	6	0	6
を	4	2	6
も	6	0	6
その他	15	0	15
計	174	7	181

上記の結果からわかるように、名詞止めが一番大きな割合を占め、その次は助詞止めである。これは朱(1996)の結果とほぼ一致した。

さらに、助詞止めについて詳しく分けると上の表2のようになる。

表2から見るとわかるように、助詞止めの見出しの181本の内「へ」で止める見出しは92本で、約50%を占める。「に」で止める見出しは49本で、約3割を占めている。これは朱(1996)の結果とずれているが、「へ」、「に」で終わる見出しの数が上位の2位という点は同じである。以上の結果で分かるように「へ」と「に」で終わる見出しをあわせて、助詞止めの見出しの約8割を占めている。その多さが見出しの特徴だと言えるだろう。

見出しでない通常の文では、「へ」に比べて、「に」の使用率が遥かに高いと思われる。同期間内⁵の新聞記事の本文も含め、「へ」と「に」でキーワードとして調べたところ、「へ」の出現数は33513回で、「に」の出現数は92679回であった。「に」の使用率は「へ」の約3倍だった。しかし、今回の考察で「へ」で止める見出しは助詞で止める見出しの内、一番大きい割合を占め、「に」で終わる見出しの約2倍であった。見出しではない通常の文では、助詞「に」の使用が助詞「へ」の使用の3倍近くあるのに対して、逆に、見出しでは、助詞「へ」の使用が助詞「に」の使用の2倍近くあることは、注目してよい。これは、通常の文には見られない、「へ」助詞止め、および助詞「へ」が見出しだからこそ持つようになった特徴を示している。このことは、また、見出しが持っている1つの大きな特徴である。

3. 「へ」で止める見出し

ここでは、見出しを止める「へ」の使い方を明らかにするため、通常の文の格助詞「へ」の使い方と比較してみる。

3.1 通常の場合の「へ」の用法

まずは、通常の場合の「へ」の用法について見てみよう。

通常の場合、「東京へ行く」「会社へ行く」などのように「へ」の前に名詞、後ろに述語が来るのが自然で、普通の文である。

現代日本語文法研究会(2009)では格助詞「へ」については、次のように述べている。⁶

「へ」は、述語が移動を表す動詞のとき、移動先を表す名詞について、移動の方向を表す。

○船が港へ向かう。

○子供が夏休みに山へ行く。

以上でわかるように、通常の場合「へ」の基本的な使い方は方向を表す。たとえば、「東京へ行く」は「東京に行く」とも言えるが、「東京に行く」というのは移動を踏まえた着点になる。「東京に住む」のような方向性がないものが、「東京へ住む」といえないだろう。したがって、普通には「へ」や「に」は決してテンス

⁵ 読売新聞 東京版 一面 2014年一年分。

⁶ 『現代日本語文法研究会』(2009: 60)から引用。

的に未来性や予定性を意味していない。

3.2 見出し末の「へ」の使い方

以上は普通の場合の「へ」の使い方を分析した。では、見出し末の格助詞の「へ」の使い方はどうであろうか。

「へ」の前に来る語について考察し、次の表3のようになる。

表3 「へ」の前に現れる語及び分類

「へ」前に現れる語の分類	「へ」前に現れる語の例	本数
場所名詞	シナ海、厳戒の地、雨どい通り外	3
集まり・催しを表す名詞	サミット	2
時名詞	未来	1
人名詞	みなさま	1
組織・集団を表す名詞	巨人	1
地位・職名・肩書きを表す名詞	横綱	1
物名詞	ペン、メダル	2
動作性名詞	提出、整備、了承、追加、協議、告発、上場、合意、反撃、崩壊、承認、支援、検査、選挙など	81
合計		92

以上でわかるように、今回の考察結果としては、見出し末では、助詞「へ」の一般的な使い方である移動の方向を表すような＜場所名詞＋へ＞の用例は僅か3例であった。

見出しではない通常の文では、助詞「へ」の基本で中心的な使い方は＜場所名詞＋へ＞である。それに対して、見出しでは、＜場所名詞＋へ＞の用法は少なく、それに対して、＜動作性名詞＋へ＞の例が、＜場所名詞＋へ＞に比べて圧倒的に多く現れた。＜場所名詞＋へ＞に対する＜動作性名詞＋へ＞の多さは、見出しの重要な特徴である。

ここで、見出しの例を具体的に上げておく。まず、少数である動作性名詞以外の例から見ておく。

＜場所名詞＋へ＞(1)a 海自 災害訓練南シナ海へ(05/28)⁷/⁸b 聖火 厳戒の地へ(01/28)／c 汚染水 雨どい通り外へ(02/21)

場所名詞以外の具体例も上げておく。

＜集まり・催しを表す名詞＋へ＞(2)a 首相、来月核サミットへ (2/20)／b 首相きょう核サミットへ(03/23)

＜時名詞＋へ＞(3) 平和の尊さ 未来へ(08/16)

＜人名詞＋へ＞(4) 読者のみなさまへ(03/17)

＜組織・集団を表す名詞＋へ＞(5) キューバ公認 外野手 巨人へ(04/19)

＜地位・職名・肩書きを表す名詞＋へ＞(6) 鶴竜初V 横綱へ(03/24)

＜物名詞＋へ＞(7)a 社業 帽子からペンへ(01/07)／b 銀盤3人娘 メダルへ(02/18)

以上で分かるように、場所名詞のほかに「へ」の前に来る語はさまざまである。たとえば、例(2)の「サミット」のような集まり・催しを表す名詞、例(3)の「未来」のような時名詞、例(4)の「みなさま」の人

⁷ ()内は見出しの日付。以下同。

⁸ 本稿では「／」を使って見出しをそれぞれ区別する。

名詞、例(5)の「巨人」の組織・集団を表す名詞、例(6)の「横綱」の地位・職名・肩書きを表す名詞、例(7)の「ペン」、「メダル」のような物名詞などである。

引き続き、動作性名詞の例をいくつか具体的に上げておく。

＜動作性名詞＋へ＞(8)a 福田氏、習主席と会談へ(10/25)／b 腹腔鏡死亡数調査へ(11/21)／c 混合診療 大幅拡大へ(06/10)／d 江渡防衛相 交代へ(12/24)／e エボラ熱 4000 万ドル支援へ(09/26) (9)a 再生エネ制度 見直しへ(10/01)／b 橋下市長 出直し選へ(02/02) (10) 介護報酬引き下げへ(12/17)

「へ」の前に来る語のうち最も多いのは、「動作性名詞」である。92 本のうち 81 本で、約 8 割を占めている。その中に例(8a)の「会談(する)」、例(8b)の「調査(する)」、例(8c)の「拡大(する)」、例(8d)の「交代(する)」のように、「する」をつけるとサ変動詞として働くものもあり、例(9a)の「見直し(を)する)」、例(9b)の「出直し選(を)する)」のように、「を」をつけると動詞として働くものもある。それに、例(10)の「引き下げ(る／を)する)」のような和語の動作性名詞もある。

例(8a)「会談へ」はこれから会談するということになる。明日か、来週かなどの未来を表す時間的な副詞を書かなくても、「へ」の働きにより、未来を表すということが読者は分かるはずだ。また、例(8e)の場合、「支援へ」はこれから支援する、これからエボラ熱を向けて、4000 万ドルを支援する予定という意味になる。いずれにしても「へ」の前に動作性名詞が来ると、これから、～をする予定、～向けて～をする、～を実現に向かっていくということを表すことである。換言すれば、「へ」の前に来る動作性名詞は「へ」の働きによって、予定性や未来性を表すことができる。このことについては後でもう少し詳しく説明する。

以下の用例も同様である。

(11)a 拉致調査 早期報告要求へ(09/20)／b 拉致問題相 山谷氏起用へ(08/28)／c 露、ウクライナ軍事介入へ(03/02)／d 米、キューバ国交交渉へ(12/18)／e 民兵の越境阻止 露が警備強化へ(06/08)／f 橋下市長 出直し選へ(02/02)／g 駆けつけ警護 公明容認へ(05/17)／h 日本、ウクライナに最大 1500 億円支援へ(03/25)／i 日朝、赤十字会談へ(02/28)／j 日朝局長級協議 再開へ(03/17)

「動作性名詞＋へ」については、次のことが指摘できるだろう。たとえば、「拉致調査 早期報告要求へ」「米、キューバ国交交渉へ」「日韓局長協議 開催へ」などでは、「拉致調査 早期報告要求へ向けて(事態が進む)」「米、キューバ国交交渉へ向けて(事態が進む)」「日韓局長協議 開催へ向けて進む」のように理解される可能性が高いし、「橋下市長 出直し選へ」「日仏 防衛装備品開発へ」などでは、「橋下市長 出直し選へ向けて事を進める」「日仏 防衛装備品開発へ向けて事態を進める」のように理解できるだろう。「へ」の後に「へ向けて事態{が進む／を進める}」という意味を理解することができるのが、この「動作性名詞＋へ」という見出しの大きな特徴である。そしてそのことが「動作性名詞＋へ」という見出しに、テンズ的に未来を読み取らせ、予定を付与している。

さらに、抽象化して言えば、「動作性名詞＋へ」は、[事態は「動作性名詞＋へ」{向かう／進む}]という形に一般化できるだろう。

また、催しを意味する名詞を取る「首相、来月核サミットへ」や、地位を意味する名詞を取る「鶴竜初V 横綱へ」なども、「核サミットへ{出発する／行く}」や、通常の文にすれば「二」が現われる「横綱になる」のように理解され、事態・出来事への進展を表している。その意味では、動作性名詞を取る場合に近づいているとも言えよう。

3.3 「へ」で止める見出しと「へ」なしの動作性名詞止めの見出しとの比較

表 3 に示されているように「へ」の前に来る語の 92 例の内、動作性名詞は最も多く、81 例で約 8 割を占めている。見出し末の「へ」の特徴をもっと明確するために、ここでは「へ」で止める見出し(「特に動作性

名詞＋へ」で止める見出しと「へ」なしの動作性名詞止めの見出しとの違いを見ていくことにする。

まず、3.2 で取り上げた例をいくつかその記事本文と照らし合わせながら、もう一度見てみよう。

(8a) 福田氏、習主席と会談へ (10/25)

[福田元首相が 29 日に北京で中国の習近平国家主席と会談することがわかった。…]⁹

例(8a)の記事には「福田元首相が 29 日に北京で中国の習近平国家主席と会談することがわかった。」とある。文全体の時制は過去であるが、そのわかった内容である「福田元首相が 29 日に北京で中国の習近平国家主席と会談する」という事象は掲載時点以後である。見出しには「会談」の後ろに「へ」をつけて、「これから会談を行う」、「会談を向けて進む」という意味理解をすることができるだろう。

(9a) 再生エネ制度 見直しへ(10/01)

[…太陽光や風力などの再生可能エネルギーの固定価格買い取り制度を年明けにも見直す方針を固めた。]

例(9a)「…見直す方針を固めた」。固めたのは方針である。その方針の内容である「再生可能エネルギーの固定価格買い取り制度を年明けにも見直す」という事象は新聞掲載時以後であり、「年明けにも見直す」。見出しには「動作性名詞＋へ」の形を取り、「へ」の働きによって、「年明け」という時間的な副詞がなくても、テンズ的に未来を読み取ることができる。見出しは「動作性名詞＋へ」の形で、「へ」の働きによって、「再生エネ制度 見直しへ向けて進める」のように理解できる。

(10a) 拉致調査 早期報告要求へ(09/20)

[…政府は近く、調査方法や進捗状況について北朝鮮側に説明を求めるとともに、報告を早期に行うよう求める方針だ。]

例(10a)の記事には「報告を早期に行うよう求める方針だ」と書かれている。主節も従属節も過去ではない。「へ」の使用によって、「報告要求」は新聞掲載時点よりあとに行われるということが明確に伝わる。

次は、「へ」なしの動作性名詞止めの見出しについて見てみよう。

表 1 に示されているように、2014 年一年分の主見出しの内、名詞止めは 1169 本で 8 割を占めている。さらにその名詞止めの見出しについて考察したところ、動作性名詞で止める見出しは 578 例であった。

以下、タイプが違う例をいくつか具体的に上げておく。(1)は既定を表す一群、(2)は予定を表す一群、(3)は、既に事態は始まっているが、まだ続いているタイプ、本稿で進行と呼んだものを表す一群である。

(1)a 不明機の残骸発見(12/31)／b 総合戦略など閣議決定(12/28)／c 羽生 全日本 3 連覇(12/28)／d 代々木公園 閉鎖(09/05)／e 岡田氏が出馬表明(12/26)／f 鳥インフル 処分完了(04/15)／

(2)a 海洋教育を充実(08/13)／b 法人税 2 年で 3.3% 下げ(12/29)／c 介護 資格要件を緩和(10/15)／d マング海賊版 削除要請(07/30)／e STAP 調査 打ち切り(12/27)／f 小保方氏あす会見(2014. 04. 08)

(3)a 所有者不明の土地増加(07/25)／b 米黒人射殺デモ拡大(08/20)／c 死者・不明 八木地区に集中(08/26)／d 豪軍受け入れ協定 検討(07/05)／e 中国、希少ウナギ大量輸出(07/24)／f がん患者・家族 1000 組調査(08/29)

その見出しを止める動作性名詞は「予定」を表わすか、「既定」を表わすかについて、その記事内容と照らし合わせながら見てきた。「予定」を表わすのが 297 例、「既定」を表わすのが 271 例、「進行」を表わすのが 10 例であった。「既定」を表わすものと比べると「予定」を表わすものがやや上回るが、比率はほぼ同じである。「進行」を表わすものが少ない。

以上で取り上げた例を各タイプごとに一つずつ記事本文と照らし合わせて見ていく。

⁹ []の中は記事の本文の一部。以下同。

(1a)不明機の残骸発見(12/31)

[…カリマンタン島南西沖の海上で、飛行機の機体の残骸を発見し、28 日に消息を絶った同国スラバヤ発シンガポール行きエアアジア機の一部と断定した。…]

(2a)海洋教育を充実(08/13)

[政府は、小中高校で教える内容を定める学習指導要領で、領土・領海や海洋資源に対する国の主権などへの理解を深める「海洋教育」を充実させる方針を固めた。…]

(3a)所有者不明の土地増加(07/25)

[地方からの人口流出などに伴い、不動産登記上の所有者が変更されずに「所有者不明」となる土地が増えている。…]

記事本文と照らし合わせてみるとわかるように、例(1a)はすでに完了した事象について述べられている。例(1)の b-f も同様である。つまり例 1 の見出しを止める動作性名詞「発見」、「決定」、「連覇」、「閉鎖」、「表明」、「完了」などはすべて「既定」を表わしている。

それに対して、例 2 の a-g のすべての例の見出しを止める動作性名詞「充実」、「下げ」、「緩和」、「要請」、「打ち切り」、「会見」、などはすべて「予定」を表わしている。これは「へ」で止める見出しと同じである。ただ、その中で、例 f には、「あす」という未来を表す時の成分が付加されていることには、注目しておいてよい。

また、例 3 の a-g のすべての例の見出しを止める動作性名詞「増加」、「拡大」、「集中」、「検討」、「輸出」、「調査」、は、すべて既に始まってはいるが今も続いている事態、本稿で「進行」(状態や進行相)と名づけたものを表わしている。

以上でわかるように、動作性名詞だけで止める場合は「予定」、「既定」または「進行」、いずれも表わすことができる。それに対して、「動作性名詞+へ」で止める場合は「予定」であり、「既定」ではない。ここに両者の大きな違いがある。

4. まとめ

本稿では、通常の文の格助詞「へ」の使い方との比較、そして「動作性名詞+へ」で止める見出しと動作性名詞だけで止める見出しとの比較を通し、用例をあげながら、見出しを止める「へ」の使い方を明らかにした。通常の場合、「へ」の基本的な使い方は方向を表す。それにたいして、見出しを止める「へ」の使い方は豊かになる。「へ」の意味役割はその前に現れる語に関わっている。見出しでよく使われ方としては、未来性や予定性などを意味するものである。「へ」で終わる見出しの多さと通常の文の格助詞「へ」が持っていない使われ方を見出しではしていることが、見出しの大きな特徴だといえる。「へ」なしの動作性名詞止めでは、「予定」、「既定」または「進行」、いずれも表わすことができるが、「動作性名詞+へ」は「予定」しか表わせない。これが両者の違いである。

調査資料：ヨミダス歴史館：データベース：YOMIURI ONLINE (読売新聞)

参考文献：

朱京偉(1992)「量的構造から見た新聞見出し」『文化言語学—その提言と建設』三省堂

日本語記述文法研究会(2009)『現代日本語文法』2、くろしお出版。

野田春美(2006)「新聞の見出し末における格助詞・とりたて助詞の特徴」上田功・野田尚史編『言外と言内の交流分野小泉保博士傘寿記念論文集』大学書林。

李欣怡(2008)『広告コピー及び新聞見出しの文末に現れる格助詞「へ」について—格助詞「に」との互換性という観点から—』名古屋大学。